

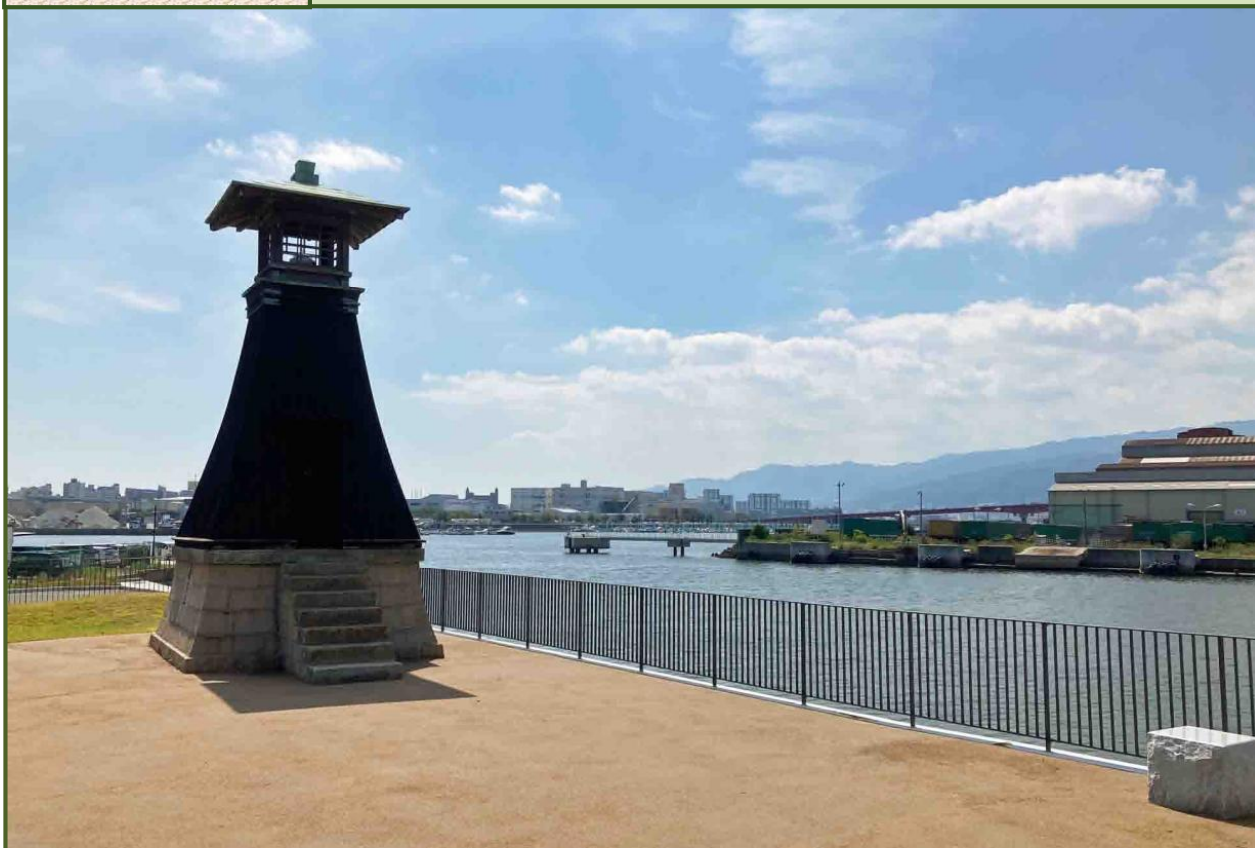


写真-1 今津灯台（令和6年8月撮影）

■ わが国最古の木造灯台、しかも今なお現役！

写真-1 は、令和 5（2023）年 11 月に西宮市今津西浜町の
新川右岸部から同市今津真砂町の新川左岸部に移設され
た今津灯台です。

文化 7（1810）年、灘五郷の旧家で酒造業を営む長部（お
さべ）家五代目当主・大坂屋長兵衛が、今津湊を入出する船
の安全を確保するため、大坂谷町奉行所の許しを得て、氏
神である福應神社の御旅所傍に私財を投じて灯台を建てま
した。現存する今津灯台は、安政 5（1858）年、六代目と
なる大坂屋文次郎によって再建されたものです。

大正時代に電化されるまでは灯火に油皿を用い、これを
釣瓶（つるべ）式の滑車で引き上げる構造だったため、大関酒
造の丁稚が油 2 合を携えて灯台に向かい、毎晩灯明を灯し
ていたそうです（現在、電灯は LED に変わり、戸外の明るさに応じて
自動点灯する仕組み）。



写真-2 昭和 35 年頃の今津灯台（『今津灯台今昔』から引用）

昭和 40（1965）年、第十代長部文治郎により解体修理され、昭和 43（1968）年には、海上保安庁から民間運営な
がら「大関酒造今津灯台」の名称で航路標識として許可を受け、海図にも記載されています。昭和 49（1974）年に西
宮市指定重要有形文化財に指定され、昭和 59（1984）年に学術調査により創建当時の姿に復元されています。

わが国最古の木造灯台ですが、今も現役の航路標識として大関酒造がこの灯台を運営・管理し、プレジャーボート
の安全確保に活躍しています。

■ 「灘五郷」を日本一の酒処にした要因の一つ「港」

江戸時代の初め、大消費地江戸に向かって酒は船で運ばれていました。江戸送りの酒の中心は内陸にある伏見や伊丹で、酒は馬借の手で、あるいは高瀬舟などで河口港まで運ばれ、そこで廻船に積み替えられて江戸に向かいます。

一方、灘地方では享保年間（1716～1736 年）になると、今日に繋がる江戸積酒造家が多く創業し、海に面した灘地方で醸造される酒は、大型の廻船で積み替えることなく運ぶことができたことから、質・量の面に加え、経済性や速達性の面でも優位に展開しました。

今回は、灘五郷を日本一の酒処にした要因の一つ「港」についてまとめてみようと思います。

■ 酒樽専用船・樽廻船の登場

江戸時代初期、上方と江戸間の物資の取引は、大坂の二十四組問屋と江戸の十組問屋の間で行われ、菱垣廻船が輸送を担っていました。酒荷もその一つでしたが、酒樽は重かったので菱垣廻船の下の方に積載され、積み込みは最初で荷下ろしは最後になることから船内滞留時間が長く、酒の品質保持を考えると好ましくありません。加えて、航海中に荷物が波をかぶったり、場合によっては荷物を投棄して航海を続けることもあり、その場合の損失は、廻船問屋の引受約款で荷主が均等に負担することになっており、酒問屋は他人の損失の補填を負わされているといった不満がありました。

享保 15（1730）年、酒問屋は十組問屋から脱退し、酒樽専用船である樽廻船の運航を開始します。安永元（1772）年、樽廻船の問屋株が公認され（大坂・伝法に 8 軒、西宮に 6 軒）、樽廻船問屋株仲間が成立します。樽廻船は速達性において有利で、余裕がある時には他の荷物も積載するようになったため、従来の菱垣廻船を圧倒していくことになります。

ちなみに、通常の樽廻船は大坂・西宮から酒の最大の消費地・江戸まで平均 12 日かかり、1 隻に四斗樽を 3,000 樽も積めることから、樽廻船による大量輸送を支えるため、灘の酒造地における湊の整備が必要になってきます。

西宮地区では西宮湊と今津湊が江戸送りの商品の出港地として活用され、拡大と定期廻船を確保するため、港の整備が行われました。

なお、写真-3 は平成 2（1990）年 11 月に大関酒造が樽廻船をモチーフにして建立した記念碑で、今津灯台と共に移設されています。



写真-3 「樽廻船」をモチーフにした記念碑

■ その昔、新川は東川に合流していた

図-1 の絵図は、安永 8（1779）年に摂州武庫郡今津村庄屋・善兵衛他 4 名が作成した今津村絵図「御代官間（はざま）七郎右衛門様え差上申候絵図控」で、高札場や取樋口、橋の様子が描かれています。

新川および久寿川は、武庫川の派川・枝川およびその派川・申川（さるがわ）の西を北から南へ流れて、合流後向きを西に変えて東川に合流しています。この時点では、まだ今津湊は築港されていません。

ただ、海岸近くで、海岸線に並行して流れる新川が東川に合流していて、その新川の左岸部、つまり新川と海の間は浜地になっています。このような河川の形態はなんとなく違和感があります。

浜地が砂州だとしたら、筆者の勝手な想像ですが、砂州が海に直接注いでいた新川の河口部を塞ぎ、結果として新川が東川に合流する形になったのかも。

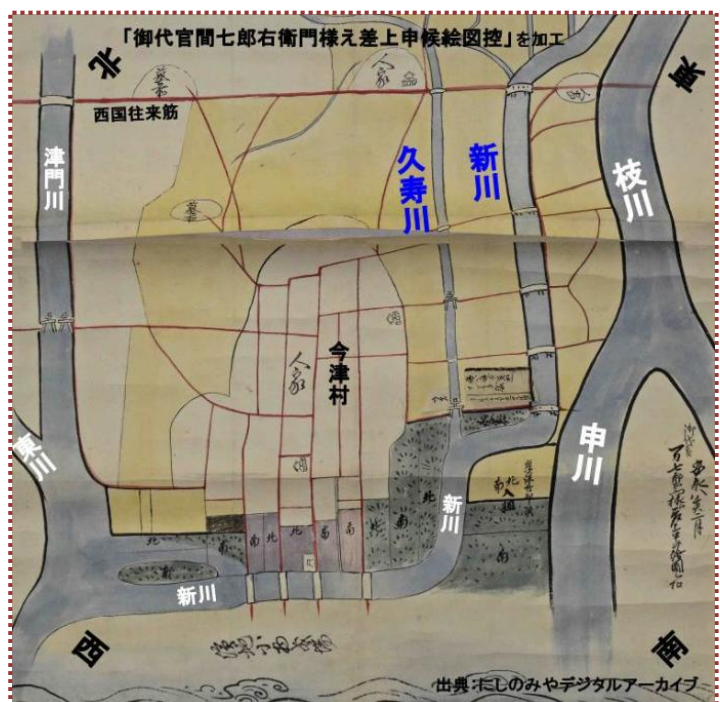


図-1 安永 8 年の今津村絵図

■ 酒造業とともに発展した今津湊

「今津」の「津」は船着き場や湊を意味することから、「今津」は「新しい湊」を意味します。今津は津門村の分村で、鎌倉時代初期にすでに存在したことは確かだそうです。

当時の今津湊は現在の春風町以北でしたが、陸化が進み、近世には街道筋の南側にも大きな集落・今津浜村（今津南組・下今津：旗本伏尾氏領）が生まれました。この村は村高こそ 400 石に満たない村ですが、海浜部に酒造業が興ったため近世後半に人口は約 1,500 人と大きく発展し、酒蔵や商家が軒を並べるようになりました。

■ 米屋伊兵衛が今津湊を築造

今津湊は、寛政 5（1793）年に米屋伊兵衛の発起によって築造されました。

図- 2 の絵図は、天保 8（1837）年 3 月に摂州武庫郡今津村庄屋・太助他 2 名が作成したもので、十二代将軍・徳川家慶（いよし）への代替わりに伴い尼崎藩に提出された今津村絵図の控えです。つまり、米屋伊兵衛が今津湊を築造後の絵図です。

河川名はわかりやすくするため現在の河川名としていますが、元の絵図では新川は東川、久寿川は九十川と記されています。

絵図を見ると、新川と久寿川の合流点と新川と津門川（東川）の合流点の間付近から海に至る水路が開削されています。これが、米屋伊兵衛が築造した今津湊と思われます。

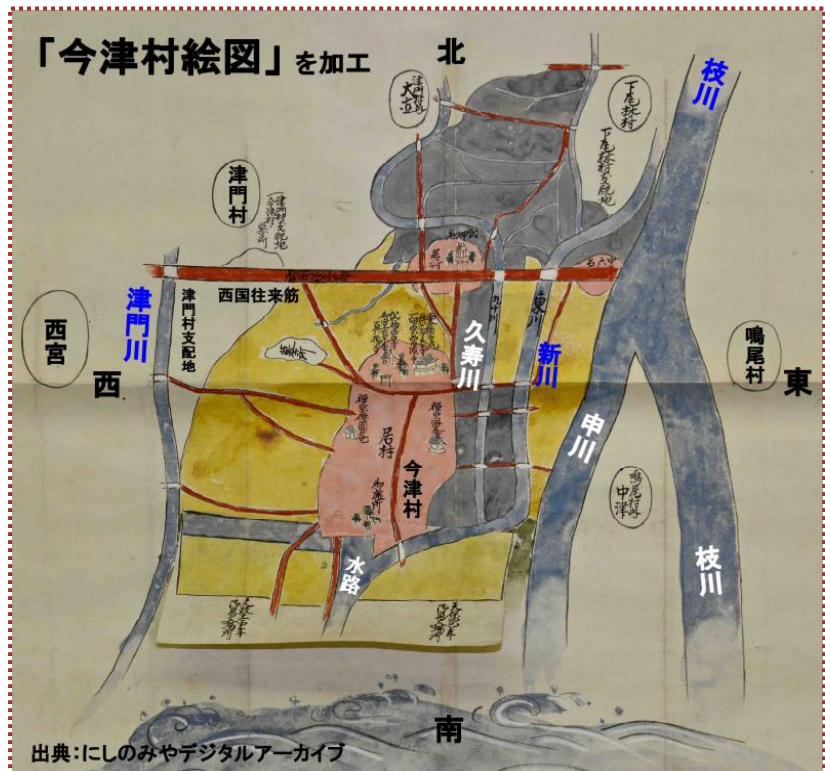


図-2 天保 8 年の今津村絵図

江戸時代はもちろんのこと、明治時代になっても阪神間は海岸線が砂浜で水深が浅く、酒を運ぶ樽廻船のような大型船は入港できませんでした。そのため、樽廻船は沖合に停泊し、樽廻船と陸地の間を小型船が往復して荷物を積み込んでいたようです。

伊兵衛は、今津村から最短で海に出られる水路を開削し、そこを湊として沖合に停泊する樽廻船のような大型船への荷物の積み込みに便宜を図ったものと思われます。

なお、水路の西には「文政 11（1828）年御高入場所」、東には「天保 4（1833）年御高入場所」とあり、水路の両側が利用地になっていることがわかります。



写真-4 開削された水路が現在の今津港

■ 創建以来、長部家が代々維持管理に努めてきた今津灯台

今津灯台は、高さ 6m 余り（基礎を含むと約 6.7m）の木造袴腰付灯籠形・銅板葺屋根で、花崗岩の基壇上に建てられています。灯火部分には格子が組まれています。これは当初点灯に油皿を使用し、風雨を防ぐために油障子が貼られていた名残です。基壇の南面には、海上交通の守り神・琴平の金刀比羅宮に奉納され分灯された灯台として「象頭山常夜燈」の文字が刻まれています。

明治維新後も灯台は、毎夜、明かりを灯し続け、明治 17（1884）年には、先人の灯台建設と永年の維持管理によって公衆に利益を与えたことが認められ、明治政府より七代長部文治郎に藍綬褒章と銀盃が下賜されました。



写真-5 今津灯台の南面



図-3 今津港周辺の地図

■ 「新川・東川統合水門」建設に伴い、今津灯台を移設

新川および東川の河口部では、高潮時の浸水被害の解消、南海トラフ地震などの発生に伴う津波対策、既設の新川排水機場および東川排水機場の老朽化などに対応するため、新川・東川統合排水機場の整備が県によって進められています。

この整備に伴い、大関酒造が所有・管理している西宮市指定重要有形文化財の今津灯台が、統合水門下流側の新川左岸に移設され、令和 6（2024）年 4 月 6 日、点灯式が行われて再点灯しました。

対岸への移設となったため、灯質は従来の緑色から左岸を意味する赤色（不動赤光）に変更されています。

なお、移設工事の詳細については、兵庫県のホームページを参照してください。URL は下記のとおりです。

https://web.pref.hyogo.lg.jp/hsk08/press2/amakan_kasen.html



図-4 新川・東川地震高潮対策事業概要図（尼崎港管理事務所提供）



写真-6 完成した新川・東川統合水門

■ モノローグ

日本酒の国内出荷量は、ピーク時の昭和 48（1973）年以降減少傾向で推移、これまで堅調に推移していた特定名称酒（吟醸酒、純米酒等）についても減少に転じているそうです。

そのような中、令和 6（2024）年 7 月にイギリスで開かれた世界最大規模のワイン品評会 インターナショナル・ワイン・チャレンジで、日本酒部門の最優秀賞に都美人酒造（南あわじ市）の純米吟醸酒「都美人 太陽」が選ばれました。兵庫県からの選出は初めてだそうです。地方の蔵元もがんばっているようです。

アメリカンブルー

ヒルガオ科・エボルプス属の多年草。開花期は 5～10 月。半耐寒性なので暖かい土地では屋外で越冬できるが、霜にあたると枯れてしまうため、日本では一年草として扱われている。這うように伸びながら、1～3cm のかわいらしい青い花をいくつも咲かせる。本来は「エボルプス」という呼び名だが、1980 年代の初輸入時には種が分からなかったため、アメリカから来たブルーの花という安直な命名で定着してしまった。



写真-7 酒蔵通りの花壇に咲いていたアメリカンブルー

【参考資料】

- 1 『大関酒造今津灯台』 ニッポン旅マガジン HP
<https://tabi-mag.jp/hg0598/>
- 2 『関西の公共事業・土木遺産探訪～西宮港・今津港』 坂下泰幸 平成 24 年 1 月
http://dobokuisan.starfree.jp/51_nishinomiya-imadu/nishinomiya-imadu.html
- 3 『古地図で見る阪神間の地名』 大国正美編 平成 17 年 8 月
- 4 『今津いまむかし物語～江戸時代の今津港★築港 200 年とは』 平成 22 年 12 月
<http://www.imazukko.sakura.ne.jp/nishinomiya-style/blog/imazukko/A.html>
- 5 『にしのみやデジタルアーカイブ～御代官間七郎右衛門様え差上申候絵図控、今津村絵図』 西宮市
https://archives.nishi.or.jp/04_entry.php?mkey=8003
https://archives.nishi.or.jp/04_entry.php?mkey=8007
- 6 『チャンピオン サケ「SAKE 部門」最優秀賞』 都美人酒造 HP
<https://www.miyakobijin.co.jp/>
- 7 『砂嘴、樽廻船、今津灯台』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 8 『アメリカンブルー』 LOVEGREEN
<https://lovegreen.net/library/flower/p108840/>

※発行：令和 7（2025）年 1 月 『ひょうご水百景』 No.214

改訂：令和 8（2026）年 8 月 『ひょうご水百景』 No.214